チリ・パタゴニア1968-69 ――ある学生探検の記録 第6回

# 氷河地帯へ

安成哲三 やすなり てつぞう
名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学，地球環境学)

イラスト＝安成 晶

この連載は，現在の私ではなく，35年前に学生だった私の書いた記録である．当時，京都大学探検部に所属する学生であった私は，仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち，そして2年近くを費やして1968年にようやく実現した．帰国後，私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた．内容は，探検の思い立ちから帰国まで，私たちは何をやり，何を見聞きし，そして何を考えたかを，あくまで私自身を通して記したものであるが，いくつかの不運が重なり，結局，そのまま35年間，眠り続けることになってしまった．今回，1960年代末の学生による「探検」の記録として，ほとんどそのまま『科学』に，十数回に分割して掲載していただくことになった．

前回(第5回，8月号)は，1968年の暮れに行ったプエルト・エデンのあるウエリントン島内部の山と湖の短い踏査と，プエルト・エデンの入り江にひっそりと暮らす人たちについて，報告した．現地の人もほとんど足を踏み入れることのないこの島の内部に，1500 mほどの針のような岩峰を見出し，ちょっとした「地理学的発見」の気分を味わったりした．年が明けて1969年の1月はじめに，私たちは，漁船「モロッコ」号に頼んで，ようやく氷河地域の観測・調査に出発した．今回は，南パタゴニアの氷床地域に深く入りこんだフィヨルドの海岸に上陸し，降り続く雨の中を，HPS10氷河のある湖畔に観測のためのベースキャンプを作るまでの苦労を報告する．

## 漁船「モロッコ」

ぼくたちは，できるだけ早く，氷河地帯に入りたかった．氷河観測の場所も，第2次偵察で，ファルコン・フィヨルドのHPS10氷河と決定していた．が，なにより，足がなかった．持参した「きょうと」号は，エンジン故障で，早くも使いものにならず，バエレマエケル神父の，ヤマハ・モーターボートは，まだ来ない．年が明けてすぐ来る「ナバリノ」号に運ばれてやってきても，六甲隊が優先的に使うので，遅くなる．空軍ポストのボートは，その「ナバリノ」号で，プンタ・アレナスに返される．だいたい，ポストのボートは，空軍のものではなかったのだ．メシエル水道の難所，イングレス海峡に座礁している貨物船の救命ボートを，ぶんどってきたものだ．そういえば，年末のある日，ポストの軍人たちは，数人の漁師と，その貨物船に，ぶんどったそのボートで出かけた．翌朝早く，いくつもの，砂糖のはいった袋や，時計などを，意気揚々として持ち帰った．エデンの住民の砂糖は，すべて，そのパナマ貨物船からの「おちょうだい」でまかなわれているという．「海賊基地エデン」，ぼくたちは，冗談半分に彼らと言いあった．が，貨物船の船主から，ボー

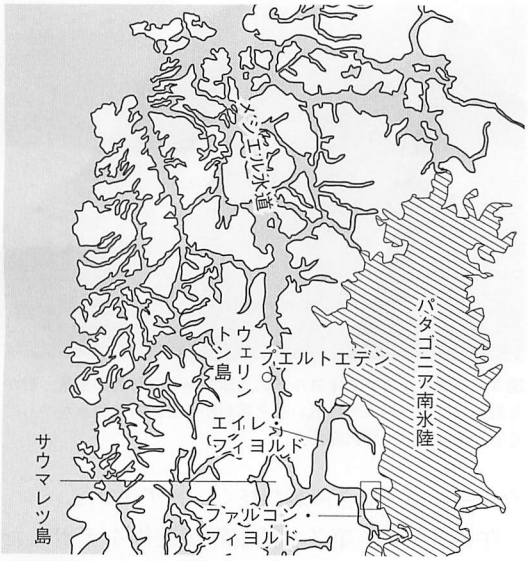



図1――チリ・プエルト・エデン付近.

トを返してくれと言ってきたのだ.「悪いやつだ」ポストの人たちはこぼしていた.

というわけで,弱っていたところ,おおみそかの日,1隻の漁船がエデンにやってきた.名は「モロッコ」,船長はアルベルトという,長身の,ハンサムな男だ.ちょっと,映画俳優の,デビッド・ニヴンに似ている.

さっそく,トロー氏に頼んで,交渉する.が,この紳士,なかなかのやり手だ.1日のチャーター料として,2000エスクードを要求してくる.2000エスクードといえば,約7万円だ.乏しい財政から,そんな金は出せない.金でなくて,何か物はいらないか,ときくと,電池がほしい,という.電池なら日本からたくさん持ってきている.こちらが困らぬ程度になら,やれるというと,乾電池6個と300エスクード(約1万円)でいいという.即座にオーケーだ.単一の乾電池1つが,なんと1万円の値うちを果したわけになる.この辺ぴな地域で生活している人にとって,ラジオは,唯一の楽しみであり,外界からの情報源である.家にラジオのアンテナが立っていることは,丁度,一昔前の日本で,テレビのアンテナが立っているのと同じ意味を持っている.しかし,町のように電線が引かれているわけではない.ラジオも,すべて電池式だ.ところが,一たん電池が切れると,なかなか補給できない.ラジオはあっても,開店休業となる.そんなところだから,電池

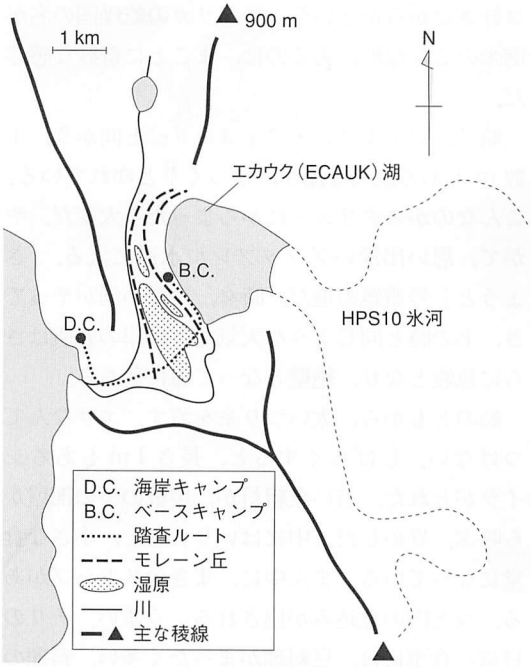



図2――HPS10氷河付近.図1の四角い枠の部分の拡大図.

の価値は高いわけだ.六甲隊も,アルベルト船長と,数個の電池と,20個ほどの肉のかん詰と交換した.電池さまさまだ.

1969年1月3日.年末一杯続いた異常晴天も,年が明けると,急に悪くなった.けさは,夜の寒冷前線通過でぐっと冷えこむ.500 m以上には新雪がつもっている.氷河地帯への出発の日にふさわしい天気だ.ポストのトロー氏や六甲隊の阪上秀太郎隊長*1,岩田修二君等も,起きてきて,見送ってくれる.六甲隊も,3,4日後には,ここを後にするはずだ.サンチャゴで,3月頃ぶじ再会することを約しあう.トロー氏も,4年間もの所長職を終え,近いうちにプンタ・アレナスに帰る.もう会えないかもしれない.

午前6時半.「モロッコ」号に乗って出発.本当は前日出発のはずだったが,アルベルト船長,正月の飲み過ぎでダウンして,1日のびてしまった.「モロッコ」号は,長さ12〜13 m,1 t程度の木造漁船だ.プエルト・モントからプンタ・アレナスの間を,漁をしながら放浪している.「モロッコ」という名の由来をきくと,船主がモロッ

*1 六甲学院教諭(日本史).同山丘部長,OB山岳会長を務めた.著書に『パタゴニア氷床横断』『銅鐸の謎』など.2001年永眠.

コ好きだからだという．アフリカの乾燥国の名が南米のこんな地にあるのは，まことに奇妙な感じだ．

船は，ファルコン・フィヨルドへと向かう．十数mもある巨大な藻が，ゆっくりとゆれている．こんなのがスクリューにからまったら大変だ．やがて，思い出深いグラップレル水道に入る．「きょうと」号遭難の地だ．時々，冷たい雨がやってき，あの時と同じような天気だ．両岸の岩肌はさらに急峻となり，絶壁となって海に落ちる．

船のともから，太いつり糸を流す．エサなんてつけない．しばらくすると，長さ1mもあるシイラがとれた．若い乗組員が，甲板の下の部屋から呼ぶ．昼めしだ．中にはいりこむと，小さな食堂になっている．まん中に，まきのストーブがある．豆と肉の煮込みが出される．うまい．チリの日常の食事には，豆料理がまったく多い．料理のしかたも，他の野菜や肉との煮込みに，ほとんど限られる．それも日本人のように，カレー，ソース，しょう油，こしょう等とあらゆる調味料，香辛料は使わないが，野菜や豆そのものの味をうまく出している．およそ，チリ人は，料理にこるということがない．パーティなどの時も，品かずが少しふえ，量がうんと多いだけだ．どの料理も，材料を，酢，塩，砂糖，それにアヒ(ひじょうに辛いとうがらし)でかんたんに味をつける．それが，とてもうまい．

ファルコン・フィヨルドに入ると，イルカが，船のまわりにまつわりつく．船の前でとびあがったかと思うと，すぐもぐってしまう．しばらくすると，今度は船の横に，2,3頭いっしょにとび出す．船の前に，後になりながら，しつこくついている．カメラをかまえるが，いつどこに飛び出すかわからない．

前方に，小さく白いものが見えてきた．氷山だ．次から次へと出てくる．大きなものは，1軒の家くらいもあろうか．前衛彫刻のような，奇怪な形のもの，今にもひっくりかえりそうなもの，見ていて飽きない．この船ぐらいのばかでかいのが，すぐそばを通る．こんなのがまともにぶつかれば，ひとたまりもない．アルベルト船長は，なれているのか，平然としている．静かなフィヨルドに，

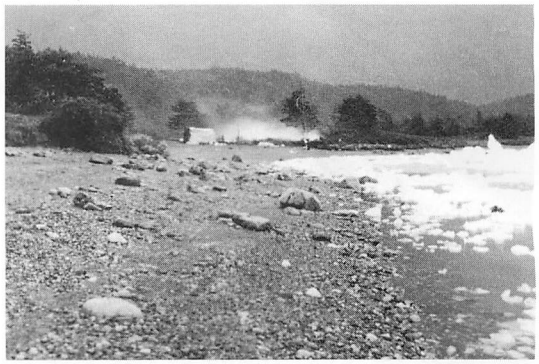


**図3——ファルコンフィヨルドの海岸キャンプ付近の風景．**静かな海面には毎日のように低い雲と霧がかかり，時に流氷がやってくる．伊藤(由良)隆氏撮影．

ウォーというなき声がひびく．アザラシだ．

午後2時半．第2次偵察隊が装備をデポした海岸につく．HPS10氷河が流れでている湖が，この奥にある．海岸は遠浅だ．「モロッコ」号は岸につけない．仕方なく，引いてきた小ボートに装備を分けて海岸へ運ぶ．アルベルト船長は黙々と1人で小ボートをあやつって運搬してくれる．

この付近の海岸は，水温が低いため，エデン付近のように，チョルガなどの貝類はまったく見られない．食料つきたらピンチだぞ．

木のボックスが十数個．海岸に，みるみる荷物の山ができた．総量は1.5t位だ．「モロッコ」号は，引き潮による座礁をさけて，大急ぎできびすを返した．

これから1カ月は，全く文明との隔絶した生活だ(図3)．何かあっても，エデンに帰るすべはない．1週間に1度，見にくる予定の神父のボートを除いては．それも，ほんとうに来るかどうか，確証はない．前は海，後は氷河と氷陸地帯．大けがなどしたらたいへんだぞ．ぼくの性分として，すぐそんなことを考える．

### 海岸キャンプから湖まで

1月5日．今日から，いよいよ湖畔にベースキャンプを設営するためのボッカ(荷上げ)だ．ぼくたちの観測目標のHPS10氷河は，海岸から奥へ，約3kmのところにある湖に，その末端が出ている．ぼくたちは，その湖を，便宜上，エカウク湖と名づけた．エカウクというのは，ぼくたち

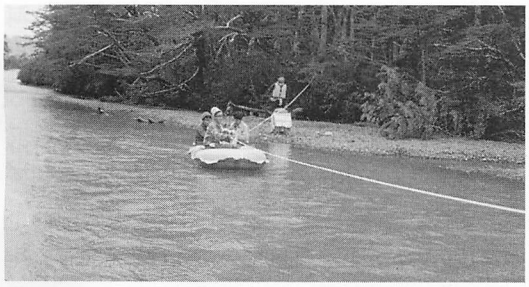


**図4——ゴムボートでの「渡し」の風景.** 学生4人が荷物を運んでいるところ. 寺本巌氏撮影.

の調査隊のスペイン語名(Expedicion Cientifica a los Andes de la Universidad Kioto)の略称ECAUKのことだ.

湖までのルートは, 前日, 偵察隊がいちおう調べている. 距離的には短いが, なかなかやっかいなルートだという.

中島暢太郎隊長を残して, 総勢5人で出発する. 1人25〜35 kg位か. 久しぶりの重荷がこたえる. が, 全部で約1 tの装備, 食糧を運び上げねばならない. 先を思うと, ちょっとうんざりだ.

しばらくは, エカウク湖からの川の河口付近の河原ぞいに歩く. いやにつるつるすべる, 玉じゃりのような河原を通り, 川ぞいの原始林に入りこむ. 大木はすべてコイウエだ. ところどころに小さな水たまりがある. まったくじめじめとして, 暗い林だ. やがて, 川の合流点に出た. 上流に向かって右手の川が, エカウク湖から流れ出ている川だ. 幅は20 m位ある. 水は, 灰白色に濁り, 米のとぎ汁のような感じだ. ぼくたちは, 左手の, 幅10 mほどの川の岸に出た. やはり水は濁っているが, やや茶色っぽい. 合流したところでは, この2つの, 色の違う水が, きれいにコントラストをなしている. どちらも, 氷河のとけた水であるのに, この色の違いはなぜだろうか.

左手の川を渡って, 2つの川ではさまれる地帯がルートになっている. が, 渡渉はむつかしい. 昨日は, 浅瀬を見つけて渡渉したが, 急流で, 中島隊長がバランスを失い, 危く溺れるところだったという. 今日は, おまけに荷をかついでいる. そこで, ゴムボートで, 「渡し」をやることにした(図4). まず, ゴムボートに, クレモナロープをつなぎ, 一方のはしは, 大木の幹に結びつけておく, つぎに, ゴムボートを, できるだけ上流に

**図5——朽ちた倒木の多い森林地帯でのボッカ(荷上げ)風景.** ひとつ20〜30 kg程度の防水ダンボール箱を背負子にくくりつけて歩く. 伊藤(由良)隆氏撮影.

運び, 2人が乗る. そして, 流れに乗りながら, やっ, とばかりに, 対岸にこぎつく. ロープをぴんとはって, 対岸の木にしっかり結びつける. ゴムボートとロープをカラビナでつなぎ, 「渡し」はできた. あとは, 荷物を乗せて, ロープをたぐれば, かんたんに渡れる.

ふたたび, 森林の中を歩く(図5). 朽ちた倒木が多い. 下生えは, やはりエデン付近と似ているが, シダ類はあまり見られない. やがて, 森林が道のように開けているところに出た. 左側には, コイウエの大木が, 松並木のようにならび, 右側は, 背の低いロブレ(チリ・ブナの一種; nothofagus pumillo)が, まるで誰かが植えたかのように, みごとに並んでいる. 下は短い草がびっしりと生えている. さっそく, 「エカウク街道」と呼ぶことにした. かつての川のあとだろうか.

数百m, 「エカウク街道」を進むと, 急にじめじめした地帯となった. 幅1 mほどの小川も流れている. 小川をわたると, 10 mほどの急な登りとなる. 今まで平地だったところに, 不自然なほどの登りだ. 登り切ると, パッと大湿原が目前に展開した. 湿原といっても, ちょっと見ると, アフリカのサバンナの景観だ. ただし, あくまで景観だけで, 一歩踏みだすと, いたるところ水たまりだ. というより, 一面の沼沢地だ. チリ側パタゴニアは, 低温で湿潤なため, 有機物が腐植せずに堆積し, 厚い泥炭層を形成しているところが多い. その表面は, 足を踏み入れるとズブズブともぐる沼地や湿原になっている. この湿原は2つのモレーン丘*2の間に堆積した泥炭層の上にあ

**図6——海岸から湖にいたる途中の池と沼沢地.** まわりはすべてコイウエの森林. 伊藤(由良)隆氏撮影.

る. 不自然な登りというのは, モレーン丘なのだ.

右に左にと, もぐらぬところを捜しながら行く. 少しでも横にそれると, たちまちひざぐらいまでもぐり, 長ぐつに水がはいってくる. めり込んで抜くのに一苦労することもある. 湿原一面の, 赤みがかった色は, 厚くおおう, 水生の苔だ. 踏むと, 弾力性があって浮き島をなしているところもある(図6).

やっと湿原から解放されると, また森林の登りだ. 50 m位登ると, 下りになる. これもモレーン丘だ. やがて, 細長く, 深そうな沼に出あう. ここも, モレーン丘とモレーン丘の間の沼地だ. 沼のふちは, 足をおくと, スッともぐる. ふちの草は浮いているのだ. のぞきこむと, 暗く澄んで, 深い. コイウエの枝をほうりこむと, スーッとすいこまれるように沈んでいく. 最後の, 急なモレーン丘の上に登ると, コイウエの枝ぶりの間から, 湖につき出たHPS10氷河の端が見える. 灰白色の水面に, 巨大な, まっ白い氷のブロックを押し出している. 末端は, 少なくとも20 mはある崖となっている. ということは, 水面下にかくれている部分の厚さは, 約100 mあることになる. それにしても, なんという白さだ. 写真で見た, ヒマラヤの氷河の, 石や土砂をふくんで, どす黒く汚れているのとは, 大きな違いだ. HPS10氷河という名は, 南パタゴニア氷陸(Hielo Patagonico Sur)第10番氷河という意味だ. かつて, 1947年に米空軍が航空測量したデータをもとに, フランスの氷河学者, ルイス・リーブトリが, パタゴニア氷陸一帯の地図を作った. その地図に, リーブトリは, 大小多数の, 無名の氷河に片っぱしから整理番号をつけた. それが南パタゴニア氷陸第10番氷河ということになっている.

湖岸は, 細かい砂利をしきつめた, 美しい砂浜となっている. 水位の変化を示す, 汀線の縞模様が, きれいに砂の上に残っている. 浜辺には, 小さな黄色い花が咲き乱れている. はじめてぼく達に見られるまでは, いったい誰のために, その美しさを誇っていたのだろうか. 波うちぎわには, 小さく砕けた氷のかけらが, 湖をふちどるように, とどこおっている. よく見ると, どれも細かい気泡が縞模様になってはいっている. 形も, 長い旅をして, やっととけるのを静かに待つ氷にふさわしく, あらゆる人生の苦労を彫りこんで, さまざまなカット・グラス模様をつくりだしている.

肩の重荷を, 大きなコイウエの根もとにおき, ひと息つく. 雨にけむる湖は, 全く静かだ. ガスにかくれた, 周囲の山から, 時々, その静けさを破って, ドドーンという音がひびいてくる. なだれだ. ここはもう, 完全に雪と氷の世界である.

さっそくたき火をして, 暖をとる. 熱いコーヒーを飲みながら, 氷河見物だ. バチャンという音. 不安定なかっこうをしていた氷のかけらが, ひっくりかえった.

昼食後, 荷物をデポし, 海岸キャンプへの帰途につく. エカウク湖から川への落ち口には, 大きな氷山がつまっている. 帰りは, ナタでじゃまな木や枝を払い, 赤旗をつけ, ルートの整備をしながら下る. まったくの未踏地に, 日本の山にある程度の道ができてしまった. 明日からは, 毎日, 川をゴムボートで渡り, 森林を抜け, 湿原を横切って, ボッカをくりかえさねばならない.

## ラジオ・エカウク

プエルト・エデンからは, ぼくたち向けに, 毎日夜10時, ラジオ放送を流してくれることになっている. ぼくたちは, ラジオ・エカウクと呼んでいた. 木に長いアンテナを張ったため, 良好にはいる. まずトロー所長の声.

「キョウト・パルティ, キョウト・パルティ, ディス・イズ・プエルトエデン, プエルトエデン.

*2 氷河が作った堆積物による丘.

……」と，スペイン語なまりの英語がはいってくる．まず，天気予報だ．毎日エデンに，南のプエルト・ナターレスから入ってくるのを，英語になおして流してくれる．だが，この天気予報たるや，日本の，「晴れたり曇ったり，ところによってにわか雨……」以上に意味のない放送だ．ほとんど毎日，同じことをくり返す．が，ほとんど同じことをくり返すのも，ある意味では当然だ．まずなにしろ，ほとんど同じような天気だから．毎日，曇りで，断続的に，時に強く，時に弱く雨が降る．たまに，パッと青空が見えたかと思うと，またすぐかくれ，にわか雨がやってくる．海岸にいると，手にとるように，その変化がつかめる．暗く，雨の降っていることを示す雲が，次から次へと，西の，フィヨルドの入口方面からやってくる．また，太陽の光が，雲間からもれて，明るくなっているのが，やってくる．そのたびごとに，雨，くもり，晴れ，となるわけだ．

次に，余りにもデータが少ない．このチリ南部諸島地域南北1000 kmの間に，観測所は，プエルト・エデンだけだ．それで天気予報をやってのけるのだから，きめの細かい予報など，望むほうがまちがっている．これでも，とくに悪天になる時など，かなりつかめることが多かった．

その他，このラジオ・エカウクは，エデンにくる定期船「ナバリノ」号の入港予定なども知らせてくる．今日(1月6日)の放送によると，六甲隊も，すでにエデンをはなれ，明日には，全員，このファルコン・フィヨルドのひとつ隣，エクスマウス・フィヨルドに上陸するという．六甲隊の阪上隊長の声がはいる．

「貴隊のご健闘をお祈りします．また，サンチャゴで元気に再会しましょう」

思えば，六甲隊とは，双方とも，計画をたてた頃から，張りあったり，協力したりであったが，これといったいざこざもなく，それぞれの予定に沿って動いていた．双方とも，はっきり目的が違うことが，それを避けさせたとも言える．とにかく，今はただ，かれらの無事と成功を祈るのみだ．

神父は，明日，六甲隊を運んだ後，ぼくたちのキャンプへ立ち寄るという．

## 日本からの使者!?

1月7日．ボッカも3日目となった．海岸キャンプから，湖までの道も，「通いなれた道」となった．湿原にも，いつのまにか，「指定コース」ができて，あまり，水にはまらなくなった．雨はあいかわらず降ったりやんだり．すぐれた雨具のおかげで，外からの雨は，まったくこたえないが，からだの中からの汗，水蒸気が，逆に外に出ず，内からぐっしょり濡れて気持が悪い．が，不思議なことに，雨がちょっとやみ，雨具をとると，スーッと乾いていく．べつに晴れているわけではない．日本の梅雨期の，なにもかもベットリと湿けることを考えると，理解に苦しむ．雨が降っている時は，湿度はほぼ100%だから，止むと急に湿度が下がるのだろうか．気象学者の中島隊長も，首をかしげていた．

夕方，海岸キャンプ付近のフィヨルド内をふさぐようにうめつくした流氷をぬって，モーターボートが，ものすごいスピードでやってきた．バエレマエケル神父の乗るヤマハのモーターボート，「サン・ハビエル」号だ．「サン・ハビエル」とは，神父の勤めているプエルト・モントのミッションの高校の名だ．「サン・ハビエル」とはいかなる聖人かと思ったら，日本でキリスト教伝道をはじめた，かのフランシスコ・ザビエルのことだ．「サン・ハビエル」号には，他にシュミットという，長身のアメリカ人的な男と，水先案内の漁師ひとりが乗っている．折しも激しく降りだした雨の海岸で，握手する．神父とは，サンチャゴ以来だ．久しぶりに聞き，しゃべるスペイン語だ．

神父は，さっそく，日本からの手紙の配達をはじめた．みな，いっせいに殺気だつ．井上民二(ブンヤ)のところにはまた彼女から来ている．みなにひやかされる．まったく，彼のところにはよく来ている．ぼくのところには，家族からだけだ．またか．が，やはりうれしい．年末に出した手紙だ．日本から，こんなへき地に，10日ほどで来ている．意外と速い．父からは，アポロ8号が月を回って，地球に帰ってきたと，感慨深げに書いている．同じ探検といいながら一方では，すでに月まで行っているというのに，他方では，未だ

にこんな地球のすみをほじくり返すような探検をやっているばかがいる．が，アポロの宇宙飛行士に，針峯を発見した時の喜び，フィヨルドのさらに奥に，ひっそりと隠れる湖と氷河を発見し，足を踏み入れた時の喜びと同質の喜びを感じることがあるだろうか．それより，なによりも，宇宙飛行士の個性は，主体性は，どこにあるだろうか．あくまで，ぼくは，ばかで通したい．ばかが高じて月へ行きたくなれば，行こうではないか．

たき火にあたっていても，ガタガタと体がふるえる．インクで書いた手紙の文字が，雨でにじんで，読みにくくなる．次の手紙で，ボールペンで書くように言おう．

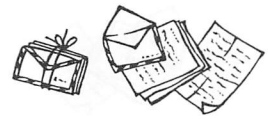
フィヨルドのまわりの山々は，ボーッとかすんで，輪郭だけが見える．「ビーグル号航海記」の中の南米最南端，ホーン岬をまわる時のさし絵そのままだ．ぼくはこの光景がみたくて，わざわざここまで来たとも言える．

神父のボートは，急ぐようにフィヨルドの霧の中に消えていった．10日後，一足先に帰国の途につかねばならぬ隊長を迎えに来るはずだが．

**なんのためのボッカ**

1月8日．あいかわらずの天気．海は，鏡のように平らで，対岸の，雪をいただいた山が，きれいに映っている．流氷群はファルコン・フィヨルドの奥から対岸ぞいにおし出してきて，フィヨルドがほぼ直角にまがっているこの付近で，ぐるっと旋回して，こちら岸にやってくる．そして，またフィヨルドの奥へ入っていくようだ．中島隊長説では，この流氷は，氷河からのものではないという．単結晶が少なく，氷の中に気泡がはいっているからだ．一般に，氷河の氷は，高圧で押されて，気泡はつぶれてしまうはずだから．しかし，ぼくは，この説は疑問に思う．平均気温10°C前後の今，海や湖が，これほどの流氷をつくりだすほど結氷するとは，とても考えられない．それに，あきらかに氷河からの流氷であるエカウク湖の氷にも気泡がある．が，中島説の完全な反証にはなっていない．氷河の氷でも，気泡があるか否か，確かめないとだめだ．

今日も，またボッカだ．やっと，エカウク湖畔に，ベースキャンプをつくる．が，もう1つのテントは，海岸にまだ残っている．それにしても，なんと計画の狂ってしまったことか．プエルト・エデンまでの船の少なさ，チリ式「アスタ・マニャーナ(また，あした)」による，すべてのテンポの遅さ，「きょうと」号の故障……．狂った原因を考えてみると，ある程度，しかたのないことばかりだ．だいたい，探検なんて，日本で予定しているとおりいくものではない．が，ぼくたちの場合，氷河調査のほかに，ぼくのテーマの，古地磁気調査等を後半にやることになっている．あまり計画が狂ってばかりいたら，結局，なにもものにならなくなるぞ．

もう，ボッカをはじめて，4日．あと，2〜3日は必要だ．ところが，氷河調査は1月いっぱいということになっている．後半の計画をすべて削れば，氷河も，かなりのことができようが，他の調査予定もあるので，それはできない．まだボッカも済んでいないというのに，隊長は，あと10日たらずで氷河地帯をあとにしなければならない．へたすると，隊長は氷河も踏むこともできないかもしれない．調査も，どの程度，短期間でやれるだろうか．1カ月のうち，10日間は，ベースキャンプ設営と撤収にかかる．なんとばかげた苦労ではないか．そんな苦労までしてやろうとする氷河調査とは，ぼくにとっていったい何だろう．たんに，氷河を踏みたいだけのことか．確かに地球科学志望のぼくにとって，有意義なものには違いない．が，別に主テーマ——古地磁気学調査——を持っている．しかし，主テーマとは言いながら，果して，石もよく知らぬ者に，まともな調査ができるだろうか．……．

ボッカの帰途，海岸キャンプに向かう森の中をとぼとぼと歩きながら，そんなことが次々に頭に浮かんでくる．連日のボッカ疲れで，足どりも重い．雨はあいかわらず降っている．「××山に登るんだ」という，唯一，単純，明快な目的を持った登山隊にはないひとつの悩みが，ぼくたちのような探検隊にはある．その悩みが，苦しい時，疲れた時，あせった時，さびしい時には，増幅されてぼくの心をしめる．